

善了寺

本堂の建築



善了寺

本堂の建築



報恩感謝の建築

— 新しい本堂をお迎えて —

住職 成田智信 浄土真宗本願寺派善了寺

この度、聞思堂建築から始まり、本堂・客殿・庫裏の新築を、親鸞聖人750回大遠忌法要記念事業として、平成23年度から平成28年度まで2期6年にわたり、東日本大震災復興支援事業とあわせて実施させていただきました。平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、その惨状を受け止めながら、ご門徒の皆さまと共に、東日本大震災復興支援事業として聞思堂の建築が始まりました。平成24年10月8日には、聞思堂が無事落慶法要をお迎えすることができました。そして、平成25年度に本堂はじめ諸施設の耐震調査を行い、調査結果を受けて、耐震化を重点項目として平成26年度から第2期事業として本堂・客殿・庫裏の建築が始まりました。平成26年5月8日に御本尊様に聞思堂へおうつり頂き、平成28年5月8日に新しい御本堂にお還り頂きました。そして、この度、平成28年10月8日に落慶法要をお迎えさせていただきます。

「お迎えさせていただく」というのは、住職の実感です。新しい本堂で、毎朝ご門徒の方々とお正信偈を頂いております中で、お念仏が本堂に、そして、善了寺の境内に響き渡り、多くの往生してゆかれた先人方と共におつとめをしていると味わっております。その中で、この建築は、私たちの為に現れてくださったという思いが強くなってまいりました。

第16世成田恵門住職の願いを継承し、第17世成田了恵住職の多大なるご尽力よって、平成9年に第18世住職を継職させていただきました。継職から今年は20年目にあたります。多くの先人に出会い、多くのお育てを頂きました。そして、私がこの世に生を受ける以前から、平等の慈悲のはたらきによって、今、南無阿弥陀仏にいだかれて、この度のご縁を頂きました。南無阿弥陀仏に出会うことによって、決して見捨てることのない大慈悲の中で、凡夫の姿に気づかされ、自分自身の限界や、自己中心的な姿に気づかされていくばかりです。私たちは、平等の慈悲をよりどころに人間の限界を見つめていかなければならないと思います。だからこそ、迷った時、苦悩を抱えて一人ぼっちになった時、出遇いを恵まれることが、どれほど尊いことか。一緒に悩み、一緒に迷い、議論しあい、支えあって、みんな、この日をお迎えすることができました。



お名前をあげればきりがありません。ご門徒のみなさんのご尽力はじめ、ご門徒の代表である善了寺役員会、そして、仏教女性会ふじの会、仏教壮年会のみなさん、また、事業の間、移転して頂いたお寺のデザイナーズ「還る家とにも」を支えてくれたスタッフのみなさん、そして、多くのボランティアのみなさん。特に、設計監理をおまかせした、大岩剛一氏、水野和子氏、そして、幹建設の内田社長、鏡棟梁はじめ、多くの職人のみなさん。その出遇いを結んでくださった辻信一氏、さらに、建築の際ボランティアとして参加してくださったみなさん。ここから感謝申し上げます。

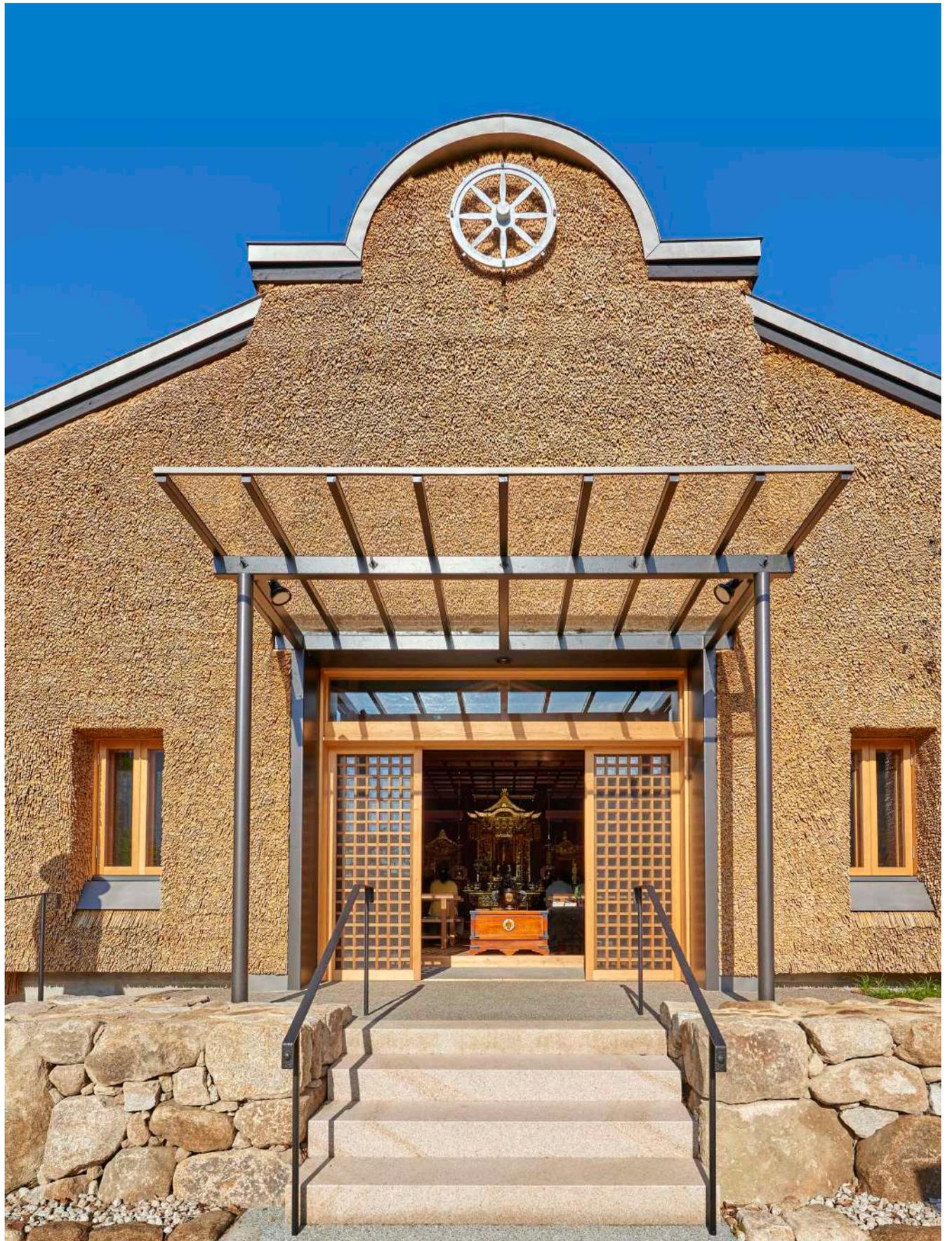
人々のご尽力だけではありません。本堂を支える基礎になってくれているコンクリートも、コンクリートを固めるための型枠になってくれた杉板も、柱となってくださった木々も、石積みの石達も、本堂の外壁のヨシも、太陽の光を電気に変えるテクノロジーも、客殿の天井の麻紙のクロスや他の建築を支えてくださる数多くのいのちが、尊厳をもって報恩感謝の建築となってくださいました。まさに、私たちの為に平等に慈悲にもよおされて、この世に現れてくださったのだと味わっております。

さあいよいよ、これからです。善了寺の報恩感謝の建築と共に、お互いに学びほぐし、学びなおしていきましょう。平等の慈悲の中で、愚かなわが身に気づかされる時、きっと多くの出遇いが恵まれてきます。現在だけではなく、過去にも未来にも広がる出遇いです。是非、善了寺にお参りください。お待ちしております。

最後にともに歩んでくれた、坊守と子供たちにここから感謝を表して

合掌

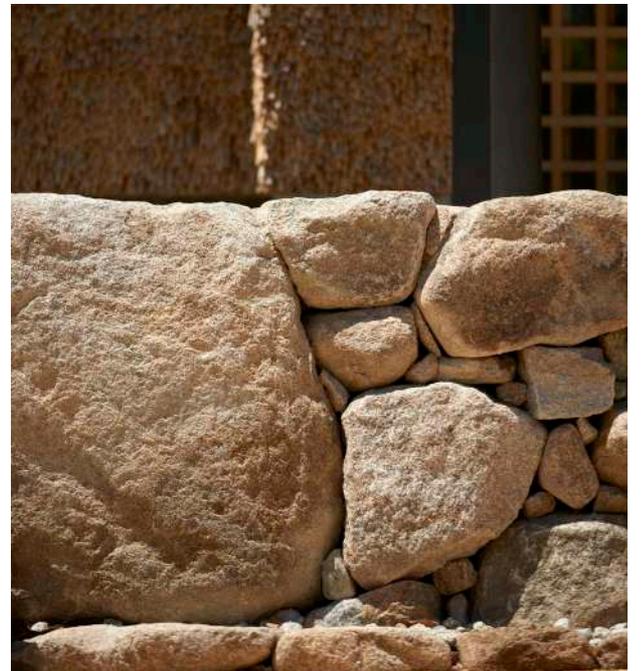
2016(平成28)年10月8日



琵琶湖のヨシ(葎)で覆われた本堂正面の壁と、
あめつしほの
穴太衆積みあなはらの基壇



左が本堂の入口に当たる向拝ごはい。右手前は客殿の玄関





2012年に竣工した間思堂(手前)から本堂を眺める





本堂内陣の阿弥陀如来像を見る。両側は土で仕上げたストローベイル壁



内陣の阿弥陀如来像と格天井。背後の二本の柱は後門柱

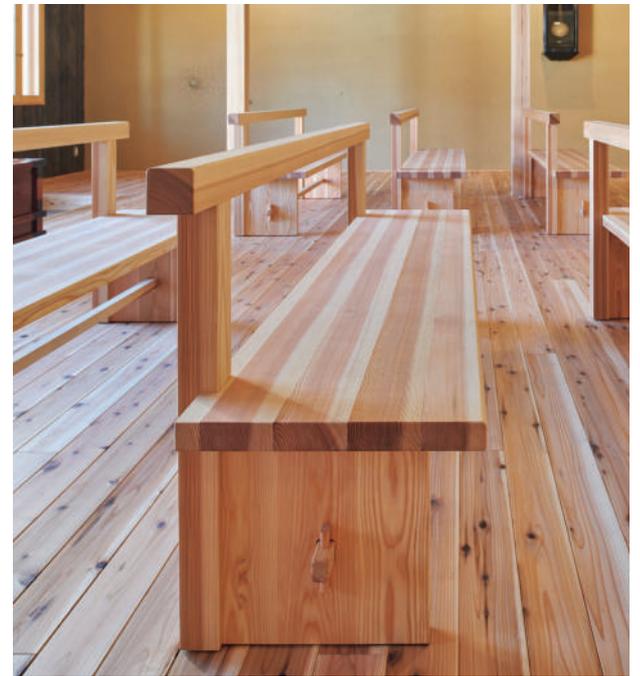


後門柱は杉の皮付き天然木

寄進者の名札は、後門柱の余り木で作られた



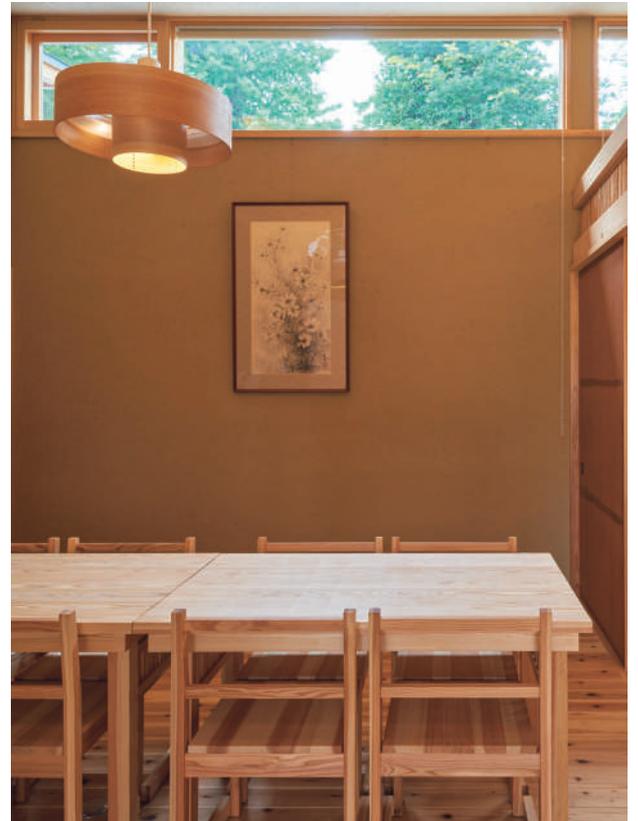
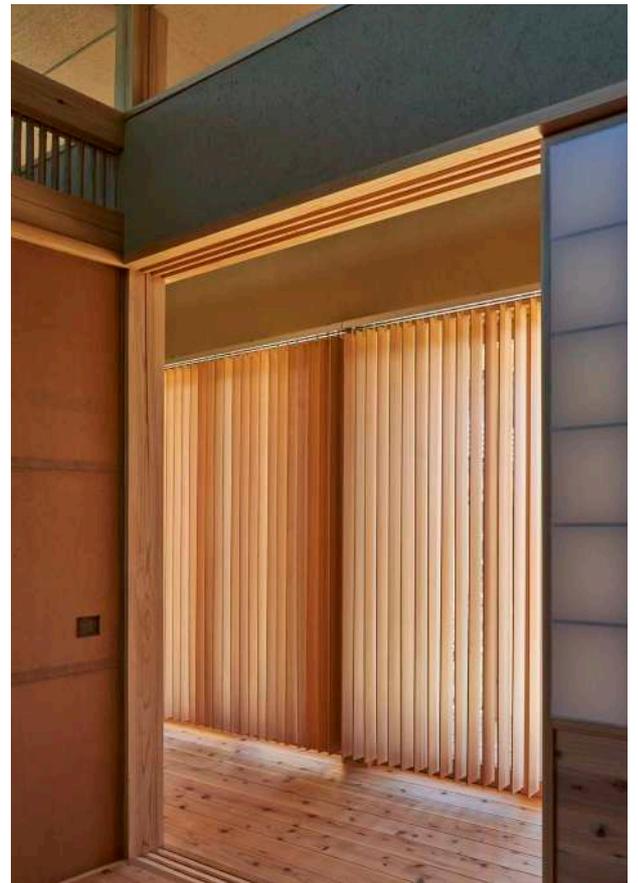
内陣から向拝越しに望む境内

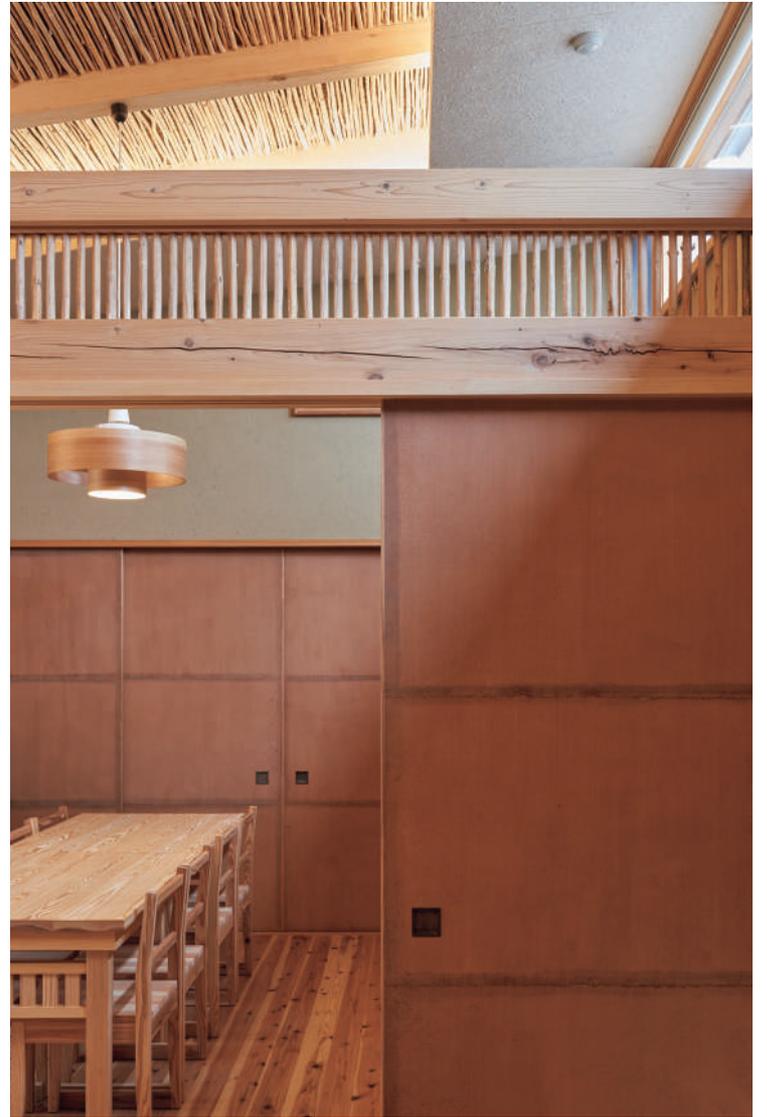


鳥取県智頭杉で制作した机(内陣)と長椅子(外陣)



鳥取県智頭町産の麻と杉でできた客殿の広間。手漉き和紙の天井。
皮付きの麻の莖を使った高天井と欄間。麻スサ入りの土壁。
椅子、テーブル、照明器具、廊下のブラインドはすべて智頭杉だ





新しいお寺のデイサービス「還る家ともに」の建築



お寺のデイサービス「還る家ともに」は、開設当初、自宅開放型デイサービスとしてスタートいたしました。住職・坊守・寺族*が暮らしている空間を使ったのです。開設当初から、そこには、暮らしがありました。開設から約10年でこの度の建築のご縁を頂きました。その間、たくさんの方々との出遇いと別れを通して、デイサービスとしての暮らしがこの空間を満たしていきました。新しい建築をとおして考えたことは、暮らしを大切にしていくことでした。それは、つながりを豊かにし、関わることを粗末にしない実践でした。

建築中、デイサービスには移転していただきました。移転された皆さんが選んでくるときに、懐かしさを感じることができるような安心感のある空間にしたいと思いました。まず、基本的な部屋の配置はなるべく変えないようにしました。和室の位置やフロアーの位置など、窓から見える風景も大切な要素です。お仏壇の位置は変更にな



りましたが、お仏壇があることで、やはり、変わることはないところが、部屋の中にできているのだと実感しています。お経を頂く中で、新しいデイサービスの竣工を待たずに往生された方々も、還ってきてくれているのだと感じています。

つながりの豊かさは、懐かしさを生み、安心につながっているのだと思います。そのうえで、暮らしをつくっていくとき、いのちのつながりを粗末にしないようにところがけました。本堂とつながる一つの建築物として、建築に対するコンセプトを大切にしてみました。暮らしとは、太陽が昇り、草原のかなたに沈んでいく、大いなるつながりの中でつくられてきたことを、自然の木々や土が思い起こさせてくれるのだと思います。それは、心と身体に大きな影響を与えていくと思います。建築の中にいきるいのちのとの関わりを粗末にしない願いが、デイサービスの活動を支えていく力になると思っています。

この建築をご縁に、これからも、皆さまと共に、日暮らしをつくっていきたいと思います。

住職 合 掌

※ = 寺族：住職とその家族







左手前から本堂、客殿、庫裡が並ぶ善了寺の夜景

仏さまの住まいをつくる

— 命とつながる学び舎 —

大岩剛一 建築家・大岩剛一住環境研究所代表

お寺の本堂を設計するという事は、仏さまの住まいをつくるということです。設計に当たって最も頭を悩ませたのは、私たちの頭にすっきり刷り込まれた既成の仏教寺院のいかめしい様式にとらわれず、いかに自由に発想するかということでした。そんな私を勇気づけてくれたのが、現住職の祖父に当たる先々代の成田恵門住職が、戦後間もない昭和30年頃に建設した旧本堂の過激すぎるたたずまいだったというわけです。

当時はクラシックコンサートや映画会、村芝居が頻繁に催され、地域に開かれたコミュニティカフェの走りのお寺だったと聞いています。現成田智信住職の代になって「カフェ・デラ・テラ」というNPO*が立ち上がってからも、その伝統は受け継がれ、講演やシンポジウム、映画や落語、ファッションショーなどが矢継ぎ早に企画されてますます拍車がかかっています。

その様子をいつも一緒に見守ってきた仏さまにとって、この本堂はきっと居心地の良い場所だったはず。門徒(檀家)さんや地域住民と仏さまとのオープンな関係、距離の近さこそ、善了寺ならではの特長に違いない。そう確信した私たち設計チームは、まず本堂の内陣と外陣の間の結果を弱めるというタブーに挑戦します。それまであった御簾をやめ、内陣の床だけ上げて結果とし、丹念に手で刻んだ柱と梁を奥までドーンとむき出しで通したのです。その結果、空間の一体感が生まれ、場の祝祭性が高まりました。

本堂の自然光は、いわゆる太陽の恵みとは意味が異なります。仏さまを照らす浄土の光だからです。仏さまの背後に上から間接光を落とすと、空間に凝縮力と親密性が増しました。仏さまとの距離がまたひとつ近くなった気がします。



昭和30年頃に撮影された旧本堂
写真提供:成田智信



撮影:粕川幸恵

そんな仏さまの住まいに使う材料には、化学物質の入った量産品の建材ではなく、自然の恵みこそがふさわしい。ヨシ(葭)、麻、麦わら、木。善了寺の建築は、植物が主役のエコハウスです。つまり、減び、再生し、循環する命の豊かさを謳歌する建築なのです。それだけではありません。森を守り、地域の素材を育てながら、持続可能な暮らしを創るために活動している人たちを応援する建築にもなっているのです。善了寺に使われている植物建材は、そのような人たちが精魂込めて作ったものです。

本堂内部の壁は麦わらのストローベイル。門徒さんやデイケア・サービスのお年寄り、住職の家族を先頭に、地域の人たちや学生、一般公募の参加者まで、延べ140名が参加してわらを積み、土をこねてできた手作りの壁です。ワークショップが終わると、水分をたっぷり含んだ土の壁から無数の麦が発芽していました。まるで新しい命が芽吹いた麦畑のようでした。

今年の5月8日、聞思堂での仮住まいを余儀なくされていた仏さまが、新本堂に2年ぶりに戻ってきました。ヨシで葺かれた新しい本堂は、門徒さんたちに長く親しまれてきた旧本堂の壁と屋根の記憶を留めています。客殿・庫裡と聞思堂の間には、縁側と一体になった路地のような、安心できる、懐かしい空間が生まれました。

死者の記憶と生き物たちの記憶が樹齢300年の樹とともに生き続ける境内。太陽と植物と土の力を借りてゆっくり呼吸する新しい善了寺は、大地の記憶を呼び覚ましながら、私たちみんなの魂を解き放つ学び舎であり、地域と共に、悩める人々と共に歩むコミュニティカフェなのです。

※:「お寺は昔、さまざまな人々が集うカフェのような空間だった」を合言葉に設立された「カフェ・デラ・テラ」は、善了寺を拠点に活動するお寺カフェの運営団体の名前だ。イタリア語のテラ(大地)にお寺のテラをかけた造語である。カフェ・デラ・テラは、2007年に善了寺の成田智信住職と地元商店会の人々、明治学院大学教授の辻 信一さんとゼミ生が中心になって、混迷する時代のお寺が果たすべき本来の役割を模索する中で誕生した、平和・環境・福祉の三分野を統合する環境文化活動を実践するNPO法人である。

本堂建築を支える優れた伝統の技

2011年の東日本大震災の直後、善了寺は着工直前だった問思堂もんしどうの建設を東北の震災復興事業として位置づけ、被災した宮城県の(株)栗駒木材に材木を一括発注したいきさつがある。自然乾燥と低温乾燥を組み合わせた同社の木酢燻煙杉は、一般に流通している高温乾燥材に比べて著しく強度があり、虫が付きにくい。新しい本堂と客殿の主要構造材は、同じ栗駒木材の材木を使って棟梁かみけさきのりの鏡今朝則さん((株)幹建設)が手刻みで組み上げたものだ。



上：本堂の木構造を組み上げる
鏡今朝則さん
下：基壇の石の納まりを確認する
栗田純司さん
撮影：粕川幸恵



戦国時代に安土城、伏見城、竹田城などを始めとする全国各地の城郭石積みによって一躍その名を広めた石工集団穴太衆あのをしゅうの、その最後の石匠一家が滋賀県大津市坂本を拠点に活動している。形も大きさもまちまちな自然石を積み、セメントで固めずに石垣をつくる。穴太衆積みと呼ばれる伝統的な石積み技術を継承する第14代目石匠の栗田純司さん((株)栗田建設 会長、文化庁選定「有形文化財等関係選定保存技術保持者」)が自ら陣頭指揮をとり、本堂基壇きだんの石を積んだ。

優れた伝統技術を未来に継承するために。本堂の建築の基本骨格ともいえる木構造と基壇が、二人の匠の手で成し遂げられたのである。

ヨシ(葭)葺き壁で琵琶湖を再生

ヨシは水と土と空気の優れた浄化機能を持ち、水辺の生態系にも重要な役割を果たしているイネ科の多年草植物だ。ヨシ原では毎年冬から春先にかけて、冬枯れしたヨシを刈り取り、火を入れて野焼きをする。この作業を繰り返すことで、ヨシは毎年元気な芽を出し続ける。

刈り取られたヨシはヨシ^ず簀や^{すだれ}簾、ヨシ葺き屋根などに活用され、長くわが国の住文化を支えてきた。だが生活様式の変化と大規模な干拓や開発、塩素漂白殺菌された安価な中国産ヨシ製品の流入が、ヨシ原に生きる人々の暮らしを変えた。ヨシ原が減り、ヨシ刈りも滞るようになって、水質汚染が進んだのである。

ヨシの新たな活用の道を切り開くことなしに琵琶湖の再生はありえない。善了寺本堂のヨシ葺き壁は、琵琶湖の東岸、安土町を拠点に活動するヨシ葺き職人、^{たけだかつひろ}竹田勝博さん(葭留)^{よしとめ}の思いを後押しする、新しいヨシの活用例となるに違いない。



本堂外壁のヨシを葺く竹田勝博さん
撮影：粕川幸恵



上：琵琶湖のヨシ群落
撮影：永江弘之

右：ヨシの刈り取り
撮影：大岩剛一



撮影：水野和子

人と人をつなぐ本堂^{げじん}外陣の壁



本堂外陣のストローベイルの壁に土を塗る古屋哲郎さん 撮影: 柏川幸恵

本堂内部の外陣と余間^{よま}の壁は、ストローベイル(straw-bale)と呼ばれる圧縮した直方体の麦わらのブロックでできている。材料の調達から運搬、製造に多大なエネルギーを使わずにすみ、表面に土を塗った厚い壁には高い断熱性と蓄熱性がある。合板もボードも使わない調湿性に優れた壁は常に呼吸をし、遮音性の高い室内はいつもまろやかな空気と静けさに満ちている。

ストローベイルは、富山市の農家が育てた麦藁^{よしもとひろあき}で吉本宏明さん(有機建築 佐吉)が作ったもの。6日間で延べ140名もの人々が集ったワークショップでは、吉本さんがストローベイル積み^{ふるやてつろう}の指導を、左官職人の古屋哲郎さん(古屋左官工業所)が荒土塗りの指導をしてくれた。大勢の人々の汗と左官職人の技術が共鳴する本堂の土壁は、人と人、人と自然をつなぐ壁なのである。



ストローベイルの積み方をチェックする吉本宏明さん
撮影: 和久愛子



水分を含んだ土壁から発芽した麦の芽
撮影: 柏川幸恵



客殿はグローバルからローカルへ

鳥取県山間部の智頭町では、衣食住とエネルギーの地域自給型経済の実現に向けた、ローカリゼーションへの移行がエネルギーギッシュに始まっている。中でも移住先の智頭町で麻の栽培免許を取得した上野俊彦さん(八十八や)は、地域の古老たちの協力で60年ぶりに無農薬・無肥料の麻の栽培を復活させ、伝統的な桶蒸法で麻の繊維を採ることに成功した。客殿には、上野さんが栽培した麻が使われている。壁土には麻のスサを混ぜ、蒸した麻の繊維から作った手漉き和紙は天井に、皮つきの麻の茎は天井と欄間に使った。



上：麻畑の上野俊彦さん 写真提供：上野俊彦
下左：天井の材料は、上野さんの麻畑で採れた麻のオガラと手漉き和紙だ
下右：智頭町で実施された、伝統的な桶蒸法で麻の繊維を採るイベント風景 写真提供：上野俊彦

林業家の大谷訓大さん(皐月屋)は、木の伐採時期にこだわった自然乾燥で虫のつかない良質な杉を作っている。大谷さんがめざすのは、先人から受け継いだ森を育て、次の世代に送り届けること。植林で荒れた杉林を、持続可能な生物多様性の森に変えていくことだ。

客殿広間のテーブルには大谷さんの森の杉が使われている。製作したのは坂本トヨ子さんが代表を務める(株)サカモトだ。智頭杉を育てている地域の林業家たちとつながり、山と木を熟知した高度な知識と技術で家具やインテリア製品を製作、販売している会社である。杉を蒸して曲げる「わっぱ」の伝統技術で作った照明器具と、樹齢80年以上の柾目の整った杉のブラインド。美しい智頭杉の特長を十分に引き出したサカモトのオリジナル製品が客殿を飾る。

グローバルからローカルへ。善了寺の客殿は、循環型社会の実現に向けて動き出した地域の若いエネルギーとつながっている。



上：大谷訓大さん。自身の森で 写真提供：大谷訓大
下左：大谷さんの森の杉を使い、(株)サカモトが制作した客殿のテーブル
下右：(株)サカモトが制作した客殿の「わっぱ」の照明器具

手のぬくもりを伝える



叩いて焼入れして、また叩いて。鉄は本来工業製品ではない。鍛えて造る、人の手が生み出すかたちだ。境内に面した本堂と客殿には、この鍛造技術で作った鉄が使われている。大法要などで吊幕に使うフックと木版を吊る金具、客殿内部の法衣掛けなど計31個の金物を制作したのは、滋賀県野洲の西川征一さん（鍛冶大鐵工）。全国各地から槌音が消えた昭和40年頃まで、損傷した農家の鋤などの刃先を修理する野鍛冶職人だった人だ。

客殿玄関の手摺と、本堂の基壇に上がる階段とスロープの手摺をつくったのは山内鈴花さん（Suzu-util）。滋賀県大津市の自然豊かな山の中にアトリエをかまえ、鍛鉄の柔らかな表情に魅せられて制作を続ける鉄のアーティストだ。

本堂と客殿の鉄は、優れた鍛造技術で農村の暮らしを支えてきた野鍛冶職人の記憶と、現代の暮らしに生かせる鍛造表現が可能にした、工業製品にはない手のぬくもりと気品を伝えてくれる。

下左：本堂、客殿の金具（左上）を数多く制作した西川征一さん（滋賀県野洲市の鍛冶大鐵工で）
撮影：永江弘之

下右：本堂と客殿前の手摺（右上）を制作した山内鈴花さん（滋賀県大津市のアトリエで） 写真提供：山内鈴花



善了寺のエネルギー計画

～ 返しても返しきれない多くの恵みに気づくことから～

水野和子 建築家・アトリエ樫



「テクノロジーとどのように関わりを結んでいくのかを、私たちは考えていかななくてはなりません。その際、根本にあるよりどころが大切になります。それは、すべての命は関わりの中にあるという理解から生まれる、気づきの営みだと思っています。私たちは、返しても返しきれない多くの恩恵の中に命を恵まれています。返しきれない御恩の象徴として、太陽エネルギーを考えていきたいのです。」

これは太陽光発電システムを本堂・客殿に導入するに当たり、成田智信住職が抱いていた強い想いである。私たちは多くの示唆に富んだこの言葉をかみしめながら、善了寺のエネルギー計画を進めていった。計画のポイントは、大きく2つに分けられる。

1. 建物そのもののあり方によって自然エネルギーを活用する

軒庇による日射遮蔽、天窓や高窓による昼光利用、南北通風や温度差による立体通風、自然素材の断熱に加え、内装の土壁や木材による調湿、建物周囲に広がる境内の木々の涼感。これらはすべて冷暖房や光環境（照明等）の省エネルギーにつながっている。また、建築材料としての木、石、ヨシ、ストローベイル、麻、土などの自然素材は製造にかかるエネルギーが低い上、おおむね再生可能である。

2. 自然エネルギー設備を導入する

太陽光発電を導入し、電力の省エネルギー化を図った。売電による収益構造は採らず、電力の自給自足を目指し、将来的には地域の発電所として貢献していく構想も含め検討を重ねた。暖房設備としての蓄熱式温水床暖房は、現状の熱源はプロパンガスだが、将来的には木質系燃料などに切替えていくことを予定している。水資源の循環としては、境内の井戸に加え、雨水タンクを設置し、境内の散水などに利用できるようにした。

これらの計画は災害対策の一環でもある。だが、訪れた人にとって、身の周りのライフラインだけではなく、自分自身のライフスタイルのあり方についても問い直すきっかけとなり、あらためて社会との関係を見直す「気づき」につながればと思っている。

全体配置図

本堂

- 1 基壇
- 2 向拝
- 3 内陣
- 4 余間
- 5 外陣
- 6 後堂

客殿

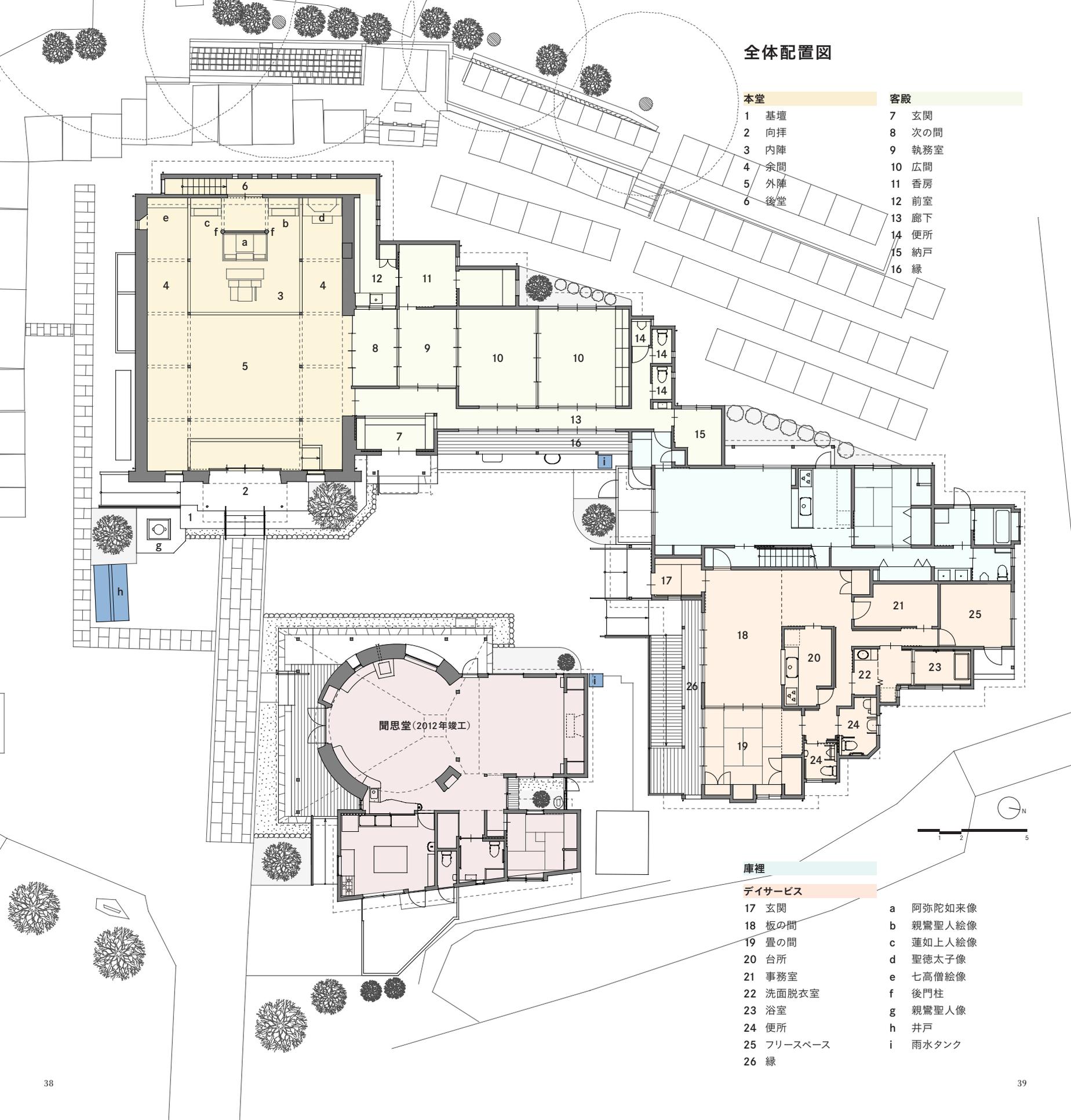
- 7 玄関
- 8 次の間
- 9 執務室
- 10 広間
- 11 香房
- 12 前室
- 13 廊下
- 14 便所
- 15 納戸
- 16 縁

庫裡

デイサービス

- 17 玄関
- 18 板の間
- 19 畳の間
- 20 台所
- 21 事務室
- 22 洗面脱衣室
- 23 浴室
- 24 便所
- 25 フリースペース
- 26 縁

- a 阿弥陀如来像
- b 親鸞聖人絵像
- c 蓮如上人絵像
- d 聖徳太子像
- e 七高僧絵像
- f 後門柱
- g 親鸞聖人像
- h 井戸
- i 雨水タンク



聞思堂(2012年竣工)

